

小学校・中学校の次期学習指導要領改訂について

株式会社 学書

2017/3/31

■次期改訂は、「社会に開かれた教育課程」を重視

2017年3月31日に小・中学校の次期学習指導要領が告示されました。総則では、学校と社会の連携・協働の実現を図る「社会に開かれた教育課程」を実現するための考え方が明記されています。

また、「主体的・対話的で深い学びの充実」と明記され、いわゆる「アクティブ・ラーニングの充実」を色濃く反映した改訂になっています。

新指導要領実施に向けた全体の流れ	教科書の動き・その他関連情報
2017年(H29) <学習指導要領改訂> ⇒教科書会社が新(指)に基づく教科書を作成	随時発表される報道発表などによりますので、実際とは異なる可能性がございます。あらかじめご了承ください。
2018年(H30) 教科書検定 ※2018＝小学, 2019＝中学, 2020＝高校	小学 2015年度版教科書を使用しながら一部先行実施＝移行措置 (英語は新教科書を利用した一部先行実施) 中学 2016年度版教科書を使用しながら一部先行実施＝移行措置 (小・中学で「道徳」の教科化スタート)
2019年(H31) 教育委員会が教科書採択・供給 ※2019＝小学, 2020＝中学, 2021＝高校	高校 2017年度版教科書を使用しながら一部先行実施＝移行措置 高校 基礎学力テスト開始 (現中2・3生対象)
2020年(H32) 新学習指導要領実施開始 ※2020＝小学, 2021＝中学, 2022＝高校	高校 学力評価テスト開始 (現中2生対象 ※センター試験廃止) (小学3・4年『外国語活動』、小学5・6年『英語』の教科化スタート)

■小学校・中学校 次期学習指導要領改訂 教科ごとの主なポイント

国語 語感を磨き語彙を豊かにする指導／「考えの形成 or 深化」の領域項目を位置づけ

○都道府県名に使用する全漢字を小4までに学習。

⇒これにより、学年配当の移行と、学ぶ漢字数の増加(20字)が発生。小学校で学ぶ総漢字数は1026字に。

(例:「富」(小5)、「城」(小6)らが全て小4に。「潟」の小4追加)

○引用の仕方や出典の示し方、情報の信頼性の確かめ方など、情報の扱い方に関する事項の新設。

○言語活動例で、「少人数での話し合い」「文章や図表の活用」「電子メールでの表現」「インターネットの活用」等が追加。

社会 主権者教育・防災教育・海洋、国土教育の改善・充実

○選挙権年齢が高校生を含む「18歳以上」に引き下げられた影響から、主権者教育の充実をはかる。

(例:小3で市町村の仕事や税金の役割などを学ぶ等)

○小6で、「日本国憲法と政治の仕組み」から「政治の働き」へ学ぶ内容の順番が入れ替えられる。

○竹島・尖閣諸島を「我が国固有の領土」として初めて明記する等、海洋、国土教育の充実をはかる。

○中学では、地理的分野が120時間から115時間へ5時間減、歴史的分野が130時間から135時間へ5時間増となる。

(例:「ムスリム商人の役割」「民族や宗教をめぐる対立」「地球環境問題」「琉球の文化」「アイヌの文化」等)

○歴史研究の進展に対応した表記の変更。

(例:「日華事変」→「日中戦争」、

「聖徳太子」→中学で、日本書紀や古事記において「厩戸皇子」と表記され、後に「聖徳太子」と称されるようになった、と扱う)

★意見反映により、2/14改訂案時に出されていた「モンゴルの襲来(元寇)」→「元寇(モンゴルの襲来)」、

「鎖国」→「幕府の対外政策」、「大和朝廷(大和政権)の統一の様子」→「大和政権(大和朝廷)の成立」の変更はなく、

「聖徳太子」→小6で「聖徳太子(厩戸王)」、中学で「厩戸王(聖徳太子)」の変更も前述のようになりました。

算 数・数 学 数学的活動・統計的な内容の充実

- 小学において、現行の4領域「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」から「数と計算」「図形」と「測定」「データの活用」(1年から3年)「変化と関係」「データの利用」(4年から6年)と統計を意識した内容に変更される。
- 小4で数量の関係同士を比較する材料として、簡単な割合を用いた比較の仕方を新たに扱う。
- 現行は中1で扱う「代表値(平均値・最頻値・中央値)」を小6へ移行。
点で分布の様子を視覚的に捉えられるグラフ「ドットプロット」を追加。
- 中1において「累積度数」の追加。
- 現行は高校で扱う「四分位範囲」「箱ひげ図」を中2で扱う。
- 中2の図形学習で「反例」を用語として新設。事柄が正しくないのを示す方法として扱う。

理 科 科学的に探究する学習活動の充実／日常生活や社会との関連を重視

- 現行は小5・6で学習する自然災害に関する内容を小4から取り扱う。
 - 現行は中3で学習する自然災害に関する内容を中1・2でも取り扱う。
放射能に関しては中2でも取り扱う。
 - 中学の化学分野において、「基礎的な金属イオン」「イオン化傾向」を扱う。
- ⇒東日本大震災を意識した内容

外国語活動・外国語科(英語) 「読む・書く・聞く・話す」の4技能を「読む・書く・聞く・話す・発表」の5領域で目標を設定

- 扱う語彙数は小3～6で600～700語程度、中学校では現行の1200語程度から1600～1800語程度まで増やす。
(高校卒業レベルで3000語→4000～5000語レベルに大幅アップ)
- 英語に慣れ親しみ、「聞く・話す」中心とした『外国語活動』を小3、4年で、そこに「読む・書く」を加えた正式教科『外国語(英語)』を小5・6年で履修する。
各学年年間35単位時間ずつ増加。(帯時間・土曜日の活用)
- 中学では、原則授業を外国語(英語)で行う。互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う、対話的な言語活動を重視。
- 中学において、「仮定法のうち基本的なもの」「S+V+O+原型不定詞」「S+beV+形容詞+that節」を新たに扱う。

総合的な学習の時間 探究的な学習活動にプログラミング教育

- 小学校ではプログラミング教育が必修化。
⇒総合的な学習の時間、算数小5「正多角形の作図」、理科小6「電気の性質や働きを利用した道具」などで必ず1回はプログラミングを体験し、論理的思考力を身につける。
- 中学では、技術・家庭の技術分野でプログラミングを扱う。

道徳 いじめ問題への対応の充実や発達の段階を一層踏まえた体系的な内容に改善

- 平成27年3月に先行して改訂済み。
- 検定教科書を導入。
- 数値による評価や他者との比較は行わず、個人内評価で記述する。
- 調査書(内申書)への記載や入試での活用は行わない。

その他 東京オリンピック・パラリンピック／和食や和楽器など日本の伝統文化

- 小学校・中学校ともに家庭科で和食の基本となる「だし」を取り上げるように明記。
- さらに、和服や和楽器など、日本の伝統と文化に関する教育を強化。
- 小学体育・中学保健体育で、オリンピック・パラリンピックを意識した、スポーツの意義・価値などに触れるよう明記。
また、陸上競技でリレーのバトン受け渡しについて触れている。
- 中学保健体育の「武道」で取り扱う例に、「銃剣道」を追加。